

# 斜里町以久科北海岸遺跡測量調査第4次報告

加藤 博文<sup>1</sup>・松田 功<sup>2</sup>・鈴木 健治<sup>1</sup>・岩波 連<sup>3</sup>・内山 晋吾<sup>3</sup>・佐藤 侑士<sup>3</sup>  
勝木 麗華<sup>3</sup>・漆原 美穂香<sup>3</sup>・大西 凜<sup>3</sup>・山口 章太郎<sup>3</sup>・渡辺 綴<sup>3</sup>・中村 賢太郎<sup>4</sup>

1. 060-0810 北海道札幌市北区北8条西6丁目, 北海道大学アイヌ・先住民研究センター 2. 099-4113 北海道斜里郡斜里町本町49, 斜里町立知床博物館 3. 060-0810 北海道札幌市北区北10条西7丁目, 北海道大学文学部北方文化論講座 4. 501-6264 岐阜県羽島市小鮫町島5-63 アルビアル羽島1F, (株)パレオ・ラボ

## Preliminary Report of Recording and Mapping for Study at the Ikushina-Kita Kaigan Site, Shari, 2010 Field Season

KATO Hirofumi<sup>1</sup>, MATSUDA Isao<sup>2</sup>, SUZUKI Kenji<sup>1</sup>, IWANAMI Ren<sup>3</sup>, UCHIYAMA Shingo<sup>3</sup>  
SATO Yuji<sup>3</sup>, KATSUKI Reika<sup>3</sup>, URUSHIBARA Mihoka<sup>3</sup>, OHNISHI Rin<sup>3</sup>,  
YAMAGUCHI Shotaro<sup>3</sup>, WATANABE Tsuzuri<sup>3</sup> & NAKAMURA Kentarou<sup>4</sup>

1. Center for Ainu and Indigenous Studies, Hokkaido University, N8W6 Kita-ku, Sapporo, Hokkaido 060-0808, Japan. *h-kato@let.hokudai.ac.jp* 2. Shiretoko Museum, 49-2 Hon-machi, Shari, Hokkaido 099-4113, Japan 3. Faculty of letters, Hokkaido University, N10W7 Kita-ku, Sapporo, Hokkaido 060-0810, Japan 4. Paleo Labo Co., Ltd., 5-63 Ogumachōshima, Hashima, Gifu 501-6264, Japan

### はじめに

本報告は、以久科北海岸遺跡において斜里町立知床博物館の支援協力を受けて実施した調査の概要報告である。北海道大学と斜里町立知床博物館との以久科北海岸遺跡における共同調査は、2004年度に第1次調査を行って以来、2008年度、2009年度と継続してきており（加藤ら2005, 2009, 2010）。今回の2010年度の調査は第4次調査となる。

これまでの報告では、海岸線の沿ってのびる砂丘上に位置する竪穴群が、とりわけ海側の砂丘縁にいくつかの群（クラスター）を形成して分布することを確認するとともに、竪穴内のテストピットの所見からトビニタイ文化期からアイヌ文化期に至る遺跡の形成過程を検証してきた（加藤ら2005ほか）。

また北海道地域に特有の竪穴住居の埋没しきらない窪みを利用した近世アイヌ期の熊送りと関わる遺構が存在することも明らかにしてきた（加藤ら2005, 2010）。

2010年度の調査は、とりわけ竪穴の窪みを利用して残された熊送り遺構の広がりを確認すること、また竪穴を残した集落との時間的連続性を検証することを主たる目的として計画実施されたものである。

### 遺跡の概要

以久科北海岸遺跡（北海道教育委員会登録番号：I-08-041）は、オホーツク海に面し東西に幅広く伸びる砂丘上に位置する。遺跡所在地は、現在、斜里町網走南部森林管理署1,142林班として登録されている（図1）。

遺跡の位置する砂丘は、海岸沿いに東西に形成された6列の砂丘列の内、砂丘Iに属するとされる（荒田ら1979）。これらの砂丘列は、全体で東西方向に3 km、南北方向に0.3-0.6 kmの大規模なものである。この砂丘の特徴として北西-南東方向に斜行する谷が形成されており、砂丘上はこれらの谷と標高2-30 mの尾根とによって起伏に富んだ地形を形成している（図2）。



図1. 遺跡位置図(国土地理院発行1/25000地形図しやりNK-55-31-5-1,2をもとに作図)。1:以久科北海岸遺跡, 2:谷田遺跡, 3:以久科砂丘南遺跡, 4:尾河台地遺跡, 5:タンネウシ貝塚, 6:ガッタンコ貝塚, 7:ガッタンコ1チャシ, 8:ガッタンコ2チャシ, 9:禅竜寺遺跡, 10:本町2遺跡, 11:貯木場遺跡, 12:本町3遺跡, 13:本町1遺跡, 14:半沢公園遺跡, 15:栄町神社遺跡, 16:楓ヶ丘遺跡, 17:クシュンコタン遺跡, 18:ウエンベツ河口遺跡, 19:須藤遺跡, 20:ピラガ丘遺跡。

本遺跡周辺は、数多くの遺跡が集中しており、砂丘の西端部には、舌状に張り出した丘陵地形を利用してアイヌ文化期のガッタンコ1チャシが所在し、隣接したやや低い丘陵上にはガッタンコ2チャシが所在する。また砂丘北西側に位置する海岸線沿いの低地には、やはりアイヌ文化期に属するガッタンコ貝塚とタンネウシ貝塚が知られている。このように本遺跡に隣接して、2つのチャシが近在し、また貝塚も確認されている状況を考慮すると、本遺跡を含めこの地域にはアイヌ文化期の複合的な遺跡が残されている可能性が高い。

### 調査体制

調査は、これまでの過去の調査同様に北海道大学と斜里町立知床博物館の共同調査として企画・実施された。また調査の一部は北海道大学の全学教育カリキュラム一般教育演習も兼ねており、22名の1年次学生が参加している。また昨年度の調

査に引き続きオクラホマ大学のJoe Watkins教授とCarol Ellick講師(ネイティブアメリカン研究プログラム)、デンマーク国立博物館のUlla Odgaard博士(SILAプロジェクト)、イルクーツク大学Ekaterina Lipnina准教授(考古学・民族誌学講座)の参加があった(表1)。

### 調査の概要

2010年度の調査の目的は、(1) 堅穴I群の堅穴の窪みを利用した熊送り遺構の広がりの確認、(2) テストピットによる堅穴群の時期の確定という2つの課題を設定した。

しかしながら、堅穴群の年代的な検討については、検出された熊送り遺構が当初予測したより数多く、試掘区を設定する時間的な余裕がなくなり、かねてより試掘を実施していた2号堅穴と3号堅穴の間のトレンチを精査し、相互の覆土と堅穴構築時の堀上土の層位的関係から構築時期の新旧関

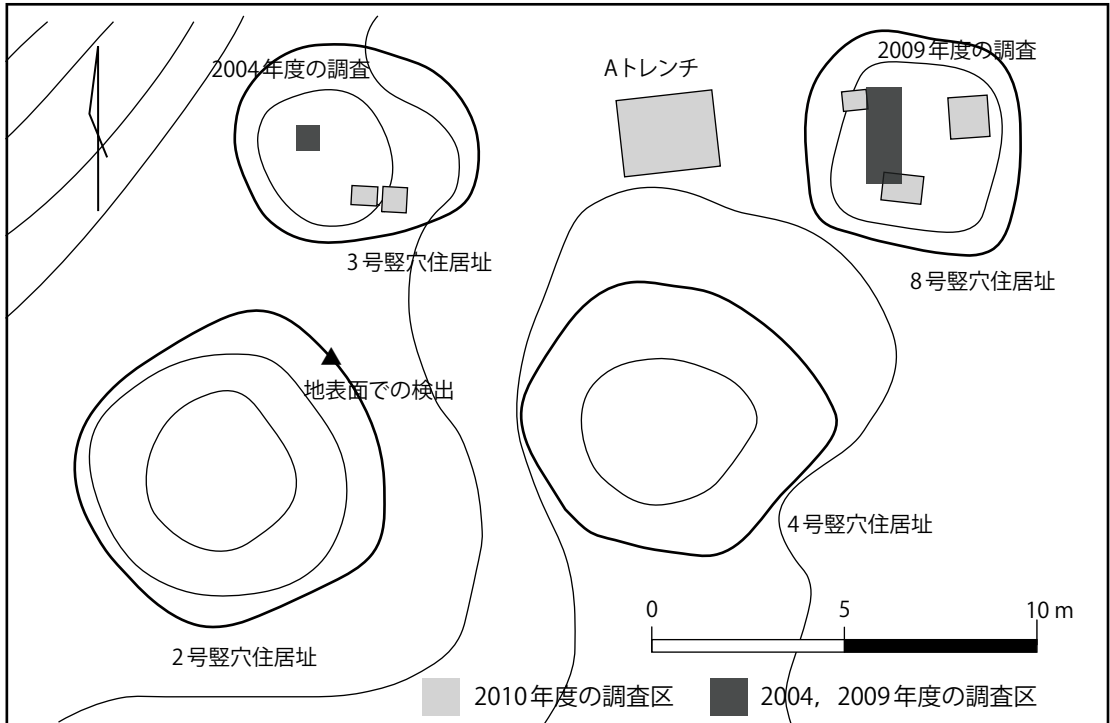
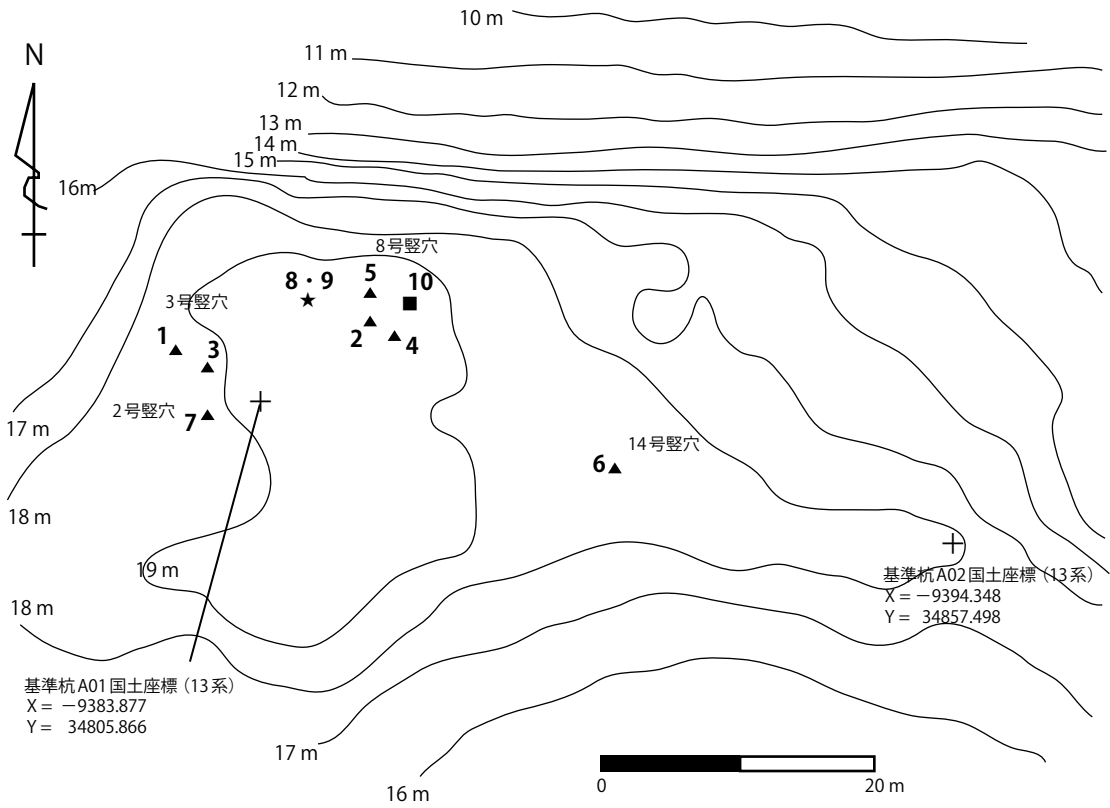


図2. 竪穴I群におけるヒグマ頭蓋骨などの出土位置。1: 2004年出土ヒグマ頭蓋骨。2: 2009年出土ヒグマ頭蓋骨。3-7: 2010年出土ヒグマ頭蓋骨。8-9: 2010年出土ヒグマ下顎およびキツネ・シカ下顎。10: 2009年出土ヒグマ四肢骨。

表 1. 調査体制.

## 調査主体者

弐和順 (北海道大学大学院文学研究科長)

## 調査担当者

加藤博文 (北海道大学大学院文学研究科准教授)  
松田功 (斜里町立知床博物館・学芸員)

## 調査参加者

鈴木健治 (北海道大学アイヌ・先住民研究センター  
博士研究員)・石原真衣 (北海道大学大学院文学研究  
科修士課程)・岩波連・内山晋吾・杉浦章一郎・勝木  
麗華・佐藤侑士・芝田亮平・漆原美穂香・大西凜・  
山口章太郎・渡辺綴 (北海道大学文学部学生)・原田  
大樹・加藤幹大・栗山拓也・大平城二・小林祐介・  
松本翼・若宮達郎・廣田俊樹・柳瀬理孝・鈴木裕基・  
小野未沙喜・神戸優理子・阿南静佳・古賀珠璃安・  
加藤玲奈・新谷双葉・細木杏奈・三好奈央・三谷真  
美・中井淑恵・港江利奈・Han Qingyan (北海道大学  
全学一般教育演習受講者)・村本周三 (斜里町教育委  
員会嘱託職員)

## 海外調査参加者

Joe Watkins & Carol Ellick (Native American Study,  
University of Oklahoma), Ulla Odagaard (SILA,  
National Museum of Denmark), Ekatelina Lipnina  
(Dep. of Archaeology and Ethnography, Irkutsk state  
University)

係を判定するのみにとどめた。

竪穴I群において確認された熊送り遺構の調査は、当初、2004年と2009年にヒグマ頭蓋骨が検出された3号竪穴と8号竪穴を中心におこった。過去の出土状況が笹根を除去した表土直下から検出されていることをふまえ、今年度の調査では、表土の除去にスコップなどを用いずに、移植ゴテと根切りバサミによって笹根の混在する厚さ2cmほどの表土を薄くはぎ取った。

この結果、2号竪穴から1個体、3号竪穴から1個体、8号竪穴から2個体、14号竪穴から1個体、および3号竪穴と8号竪穴の間の平坦部からヒグマの下顎骨が2対の計7個体分のヒグマ頭部骨とシカ下顎片、キツネの下顎骨を各1個体検出することができた(図2)。

2号竪穴で確認されたヒグマ頭蓋骨は、竪穴周辺における地表面の清掃作業中に確認された。頭蓋骨は、2号竪穴の北側外縁部で大きく内部へ傾

斜する斜面肩部において後頭部が露出している状態で確認され、精査した結果、表土中より他の口蓋部や口頭部や犬歯などが検出された。頭蓋骨は頭頂部をほぼ残しているが、上顎や口頭部、下顎部を欠損し、また確認時の状態から見て原位置を移動している可能性が高い。頭頂部の縫合線の癒着状態および頭蓋の大きさからみて成獣とおもわれる。左頭頂部に頭部穿孔の痕を明瞭に残している。

3号竪穴覆土上層では樽前a降下火山灰 (Ta-a: AD 1739) と混在して、ヒグマ頭蓋骨が1個体とやや離れて下顎1対が確認された。頭蓋上部は、西方向に口を向け、頭頂部を上にした状態で出土した(図3)。3号上層からのヒグマ頭蓋骨の出土は2004年度に確認したものについて2例目である。一方50cmほど西側へ離れた場所から検出された下顎1対は、先の頭蓋骨とは反対に東と北へ口頭部を向けて出土した。詳細は周辺の精査を経て、さらに考古学的資料の共伴関係を加味して検討する必要があるが、現段階の状況から見て、このような頭蓋と下顎の異なる方向での配置状況は、幣場に掲揚した頭蓋が落下する過程を示している可能性があり、遺構や遺物の形成過程を検討する貴重な資料になると思われる。頭頂部の縫合線の癒着状態や犬歯のサイズを考慮すると成獣オスと推定され、左頭頂部に頭部穿孔の痕が認められる。

8号竪穴上層では、2個体のヒグマの頭蓋骨が出土している(図4)。2009年においても同様に8号竪穴覆土上層よりヒグマの頭蓋骨を1個体確認しているため(加藤ら2010)、今年度の出土例を含めて本竪穴上層より計3個体のヒグマの頭蓋骨が検出されたことになる。No.2と名付けたヒグマ頭蓋骨は、8号竪穴の南縁中央において確認された。ヒグマ頭蓋骨は層位的に部分的に広がりを見せるTa-aの上位に位置し、後頭では頭頂部を上にする一方で、前頭部は左側頭部を下にした横倒しの状態で検出されている。頭蓋および上顎部分を取り外すと下から下顎骨が出土し、頭蓋部と下顎部は解剖学的位置を保っていた。この8号竪穴No.2のヒグマ頭蓋骨は、頭頂部の縫合線の癒着状況、犬歯のサイズから見て成獣オスと推定される。左頭

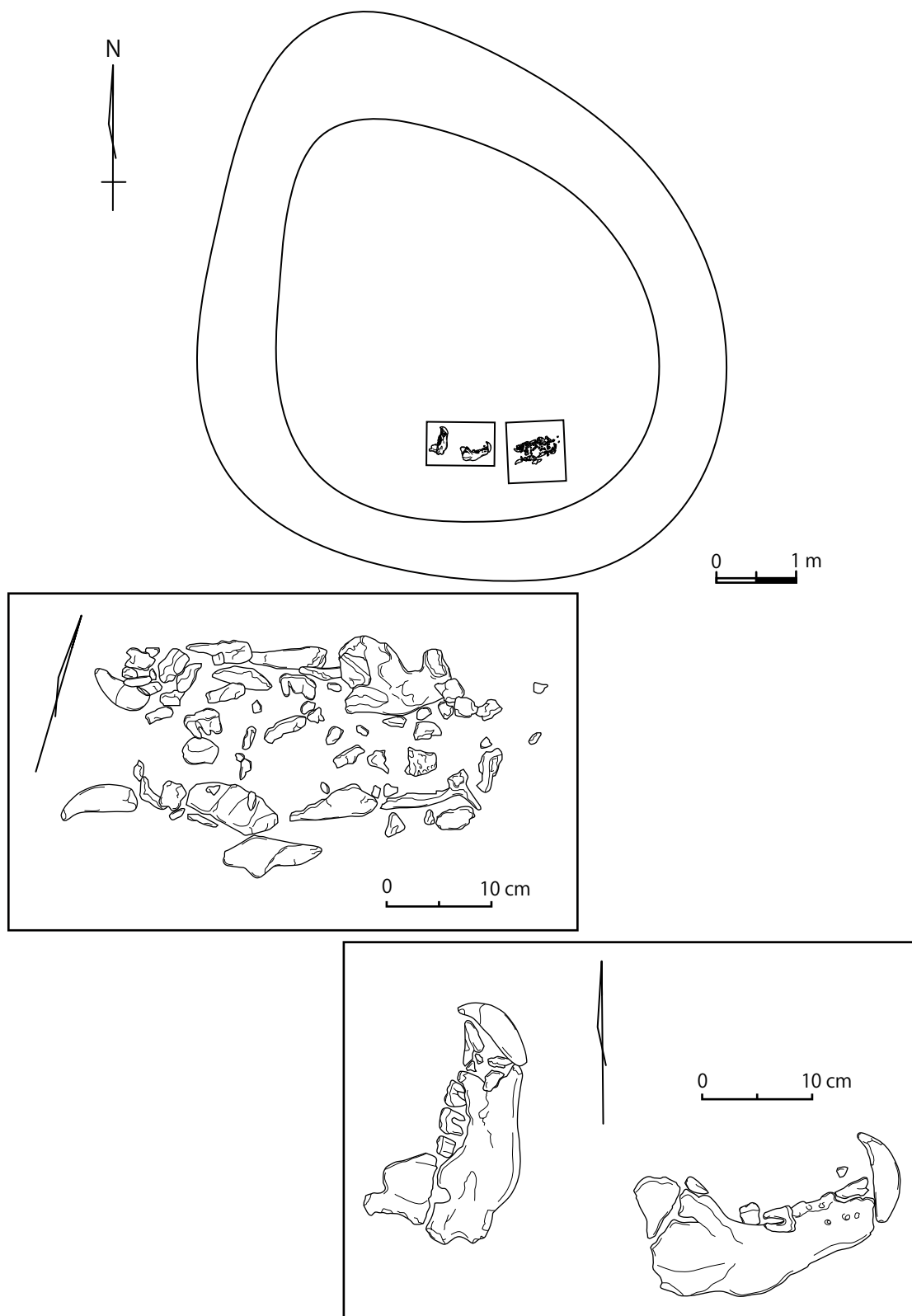


図3. 3号竪穴上層ヒグマ頭蓋骨出土状況.

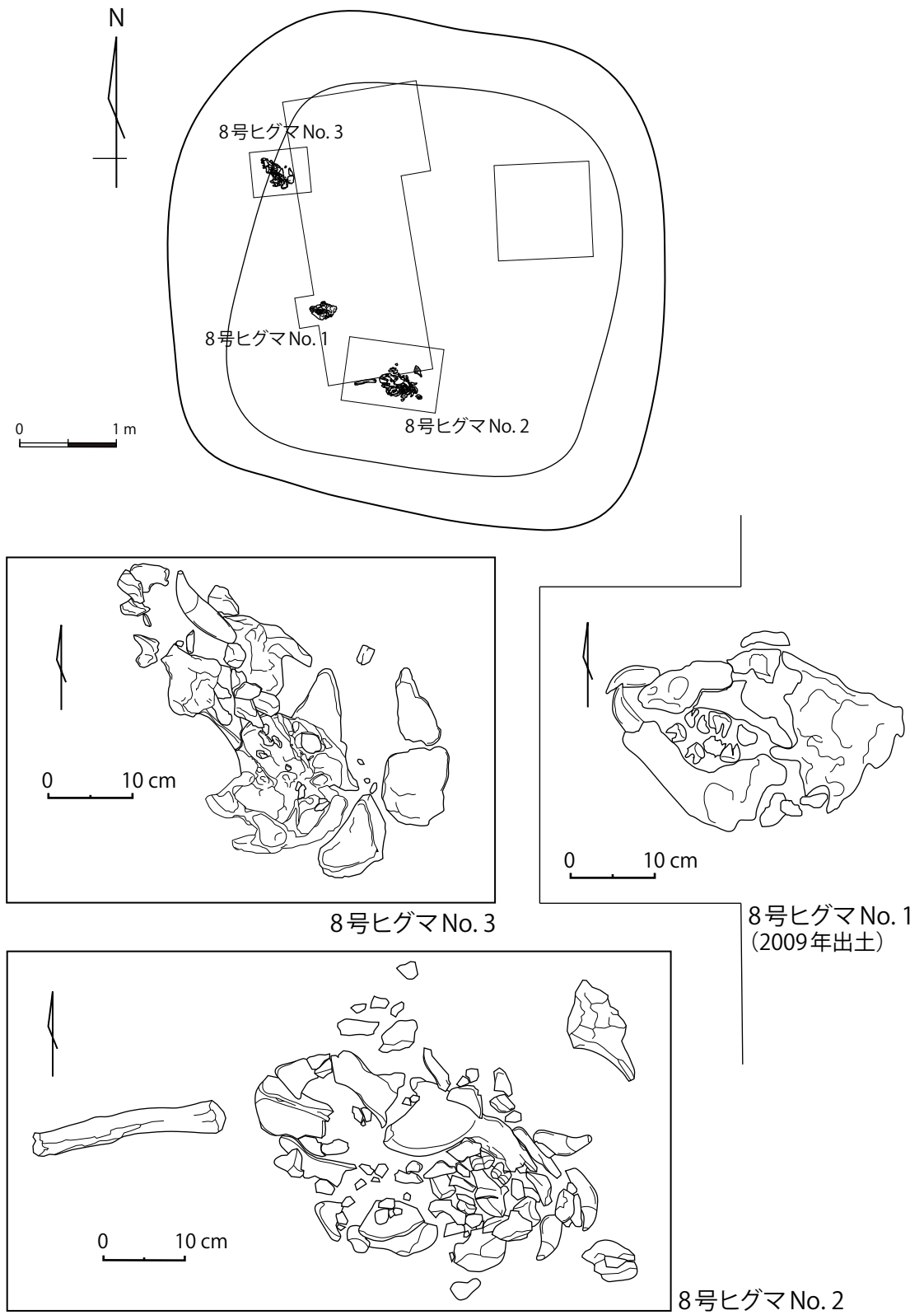


図4. 8号竪穴上層ヒグマ頭蓋骨出土状況.

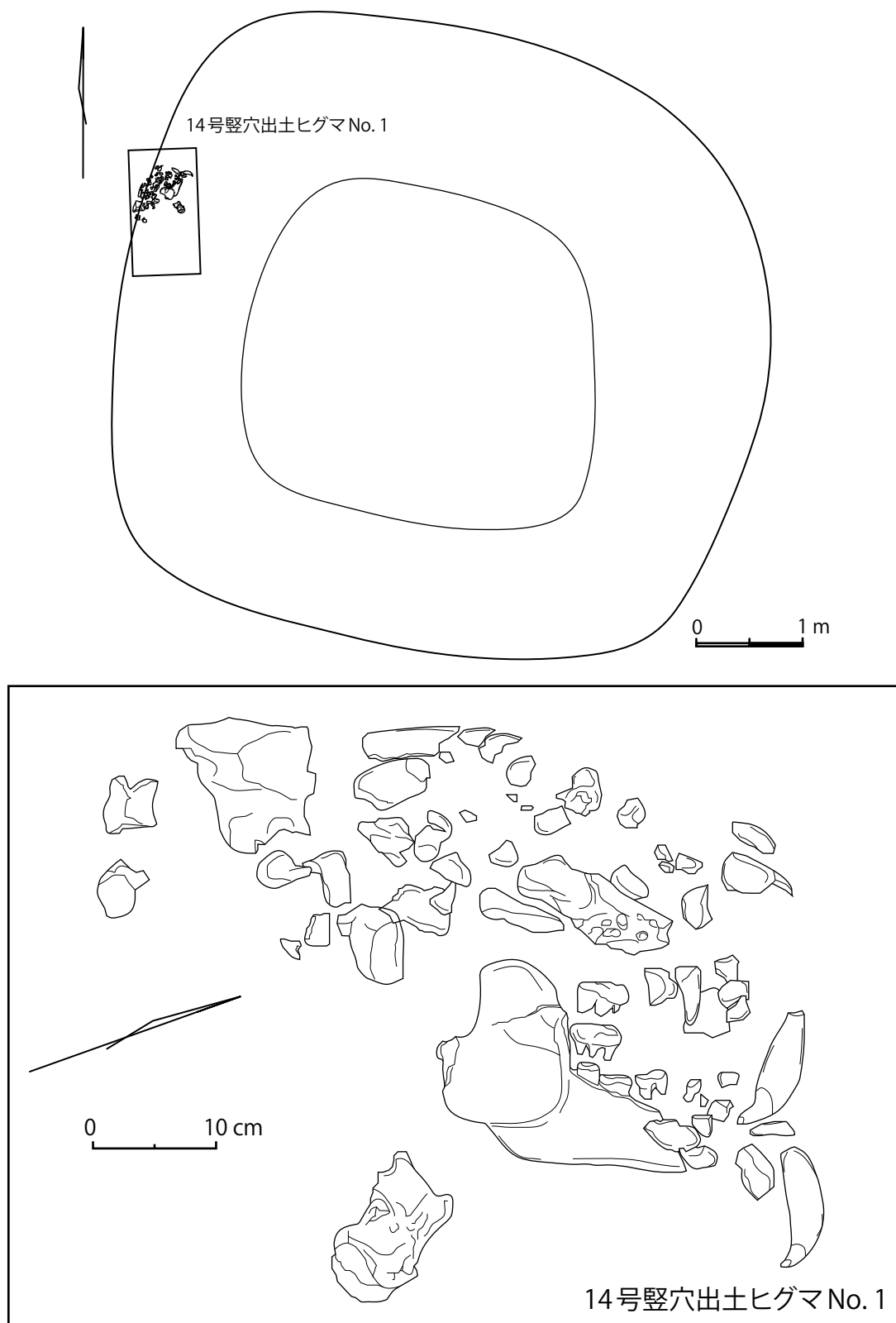


図5. 14号竖穴上層ヒグマ頭蓋骨出土状況.

頂部に頭部穿孔の痕が見られる。

8号竪穴の東縁ではNo. 3と名付けたヒグマ頭蓋骨が検出された。この頭蓋骨は表土直下でNo. 2と同様にTa-aよりも上位に位置する。竪穴の窪みの傾斜部に位置するため後頭部を竪穴内部に向け、口頭部を竪穴外へ向ける状態でやはり頭頂部を上にして検出された。この個体には下顎部は伴っていない。口頭部を竪穴外へ向け、また下顎をとまわらないなど、総じて出土状態は原位置というよりは竪穴外からの流れ込みの状態が想定できる。周辺の精査により他の部位の骨が伴うかどうかなどを考慮して検討する必要がある。本例も頭頂部のサイズ、縫合線の癒着状況、犬歯のサイズから見て成獣オスと推定される。左頭頂部に頭部穿孔の痕が観察できる。

14号竪穴においては、竪穴東縁、内部への窪みの傾斜の肩部においてヒグマ頭蓋骨が確認された(図5)。部分的に頭頂部が露出したため測量作業中に確認できたものである。後頭部はほぼ表土に露出しており、原位置を保っていない。また頭蓋骨も大部分が細片化しており、かなり動いている可能性が高い。一方下顎が口頭部を北側へ向け、左側面を下にして横倒しになった状態で確認された。犬歯などの位置から見て下顎は、大きく動いていないと思われる。下顎および犬歯のサイズから見て成獣オスと推定される。復元過程の途中であるが、左頭頂部に頭部穿孔の痕が確認できる。

このように調査の過程において、各竪穴の窪みを利用した熊送りが複数の竪穴の上層に位置することが明らかとなったことにより、急遽、3号竪穴と8号竪穴の間の平坦面に幅2 m、長さ2.5 mのAトレンチと呼称する調査区を設定し、竪穴の窪み以外の竪穴外の平坦部にも動物遺存体の広がりや遺構が分布する可能性を検証した。

その結果、このAトレンチからは、ヒグマの下顎が2対、またキツネの下顎を1対確認することができた。これらは、現在確認した範囲においては、下顎のみであり、上顎部分や頭蓋骨は検出されていない。

なお、これら今回確認されたヒグマ頭蓋骨については、復元作業終了後に年齢や特徴についての

細かな記述、死亡時期査定、DNAサンプルの採取などを行うことになっている。それらの結果が出次第、改めて詳細については報告したい。

### ヒグマ頭蓋資料の年代

2004年および2009年に出土したヒグマ頭蓋骨の年代については、これまでTa-aの上位か下位かという火山灰との層位的関係によってのみ年代的な位置づけを想定してきた。2004年度の報告において、年代的見解は検出状況の所見からおよそ18世紀の近世アイヌ期と推定した(加藤ら2005)。

今回、2004年に出土した3号竪穴覆土上層出土のヒグマ頭蓋骨の臼歯1点と2009年に出土した2号竪穴覆土上層出土の臼歯1点、および同じく2009年に8号竪穴覆土上層より出土したヒグマ頭蓋骨の臼歯2点、計3点についてAMS法による放射性炭素年代測定を行った。年代測定はパレオ・ラボにおいて実施された(表2)。

2号竪穴覆土上層より出土したヒグマ臼歯の年代は、 $281 \pm 17$  yr BP (PLD-16494)、 $2\sigma$  暦年代で見た場合、cal AD 1522–1573 (46.3%)、cal AD 1629–1660 (49.1%) となり、16世紀ないしは17世紀という年代を示した。

3号竪穴覆土上層より出土したヒグマ臼歯の年代は、 $494 \pm 16$  yr BP (PLD-16495)、 $2\sigma$  暦年代で見た場合、cal AD 1413–1441 (95.4%) となり、15世紀という年代を示した。

8号竪穴覆土上層より出土したヒグマ臼歯の年代は、1点目が $173 \pm 20$  yr BP (PLD-15683)、 $2\sigma$  暦年代で見た場合、cal AD 1665–1691 (18.1%)、cal AD 1728–1785 (47.9%)、cal AD 1793–1811 (10.0%)、cal AD 1923–1954 (19.4%) となり、暦年較正曲線が平坦な時期に該当するため年代を絞り込むことができなかった。2点目も $204 \pm 16$  yr BP (PLD-16496)、 $2\sigma$  暦年代で見た場合、cal AD 1654–1681 (25.7%)、cal AD 1763–1802 (46.9%)、cal AD 1938–1955 (22.9%) となり、同様に暦年較正曲線が平坦な時期に該当するため年代を絞り込むことができなかった。年代的には17世紀から20世紀のいずれかの年代を示している。

このように今回実施した放射性年代測定結果





図6. 年代測定を行った3号竪穴および8号竪穴上層出土ヒグマ頭蓋骨。a: 3号竪穴上層出土ヒグマ頭蓋骨No. 1 (2004年出土)。b: 8号竪穴上層出土ヒグマ頭蓋骨No. 1 (2009年出土)。

は、これら竪穴I群の複数の竪穴覆土上層に残されたヒグマ頭蓋骨が古くは15世紀から、新しくは17世紀から20世紀にかけて残されたものであるという新たな資料を提供する結果となった。

成果

1. 新たに出土したヒグマ頭蓋骨

2010年の調査では、竪穴I群を構成する竪穴群のうち、2, 3, 8, 14号の各竪穴住居の上層よりヒグマの頭蓋骨が検出された。現在、細かく破片の状態で出土した資料の接合復元作業の途上にあるが、頭蓋や犬歯のサイズから判断して、共通して成獣オスであり、また左頭頂部に頭蓋穿孔の痕を認めることができる。

今回ヒグマ頭蓋骨が複数の竪穴覆土上層において確認されたことにより、これ以外の竪穴覆土上層においても同様にヒグマ頭蓋骨が残されている可能性が高くなった。これまで出土した頭蓋骨すべてに頭部穿孔が施されていることにより、これらの頭蓋骨が儀礼行為の所産であることは疑いない。ヒグマ頭蓋骨の集中度からいって継続的に熊送り儀礼が行われていたことを想定すべきである。

表2. 年代測定結果と暦年較正.

資料名	測定番号	δ <sup>13</sup> C (‰)	暦年較正年代 (yr BP±1σ)	<sup>14</sup> C年代 (yr BP±1σ)	<sup>14</sup> C年代を暦年代に較正した年代範囲		備考
					1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲	
2号竪穴覆土上層 出土ヒグマ白歯	PLD-16494	-17.95±0.11	281±17	280±15	AD 1528 (26.9%) AD 1550	AD 1522 (46.3%) AD 1573	2009年出土資料 2号竪穴No. 1
					AD 1633 (41.3%) AD 1650	AD 1629 (49.1%) AD 1660	
3号竪穴覆土上層 出土ヒグマ白歯	PLD-16495	-15.37±0.10	494±16	495±15	AD 1421 (68.2%) AD 1436	AD 1413 (95.4%) AD 1441	2004年出土資料 3号竪穴No. 1
8号竪穴覆土上層 出土ヒグマ白歯	PLD-15683	-22.01±0.20	173±20	175±20	AD 1669 (13.4%) AD 1682	AD 1665 (18.1%) AD 1691	2009年出土資料 8号竪穴No. 1
					AD 1737 (41.1%) AD 1781	AD 1728 (47.9%) AD 1785	
8号竪穴覆土上層 出土ヒグマ白歯	PLD-16496	-18.94±0.11	204±16	205±15	AD 1799 (4.6%) AD 1804	AD 1793 (10.0%) AD 1811	2009年出土資料 8号竪穴No. 1
					AD 1936 (9.2%) AD 1946	AD 1923 (19.4%) AD 1954	
8号竪穴覆土上層 出土ヒグマ白歯	PLD-16496	-18.94±0.11	204±16	205±15	AD 1661 (13.9%) AD 1670	AD 1654 (25.7%) AD 1681	2009年出土資料 8号竪穴No. 1
					AD 1778 (35.3%) AD 1798	AD 1763 (46.9%) AD 1802	
					AD 1942 (19.0%) AD 1953	AD 1938 (22.9%) AD 1955	

AMSによる年代測定は(株)パレオ・ラボにおいて実施。

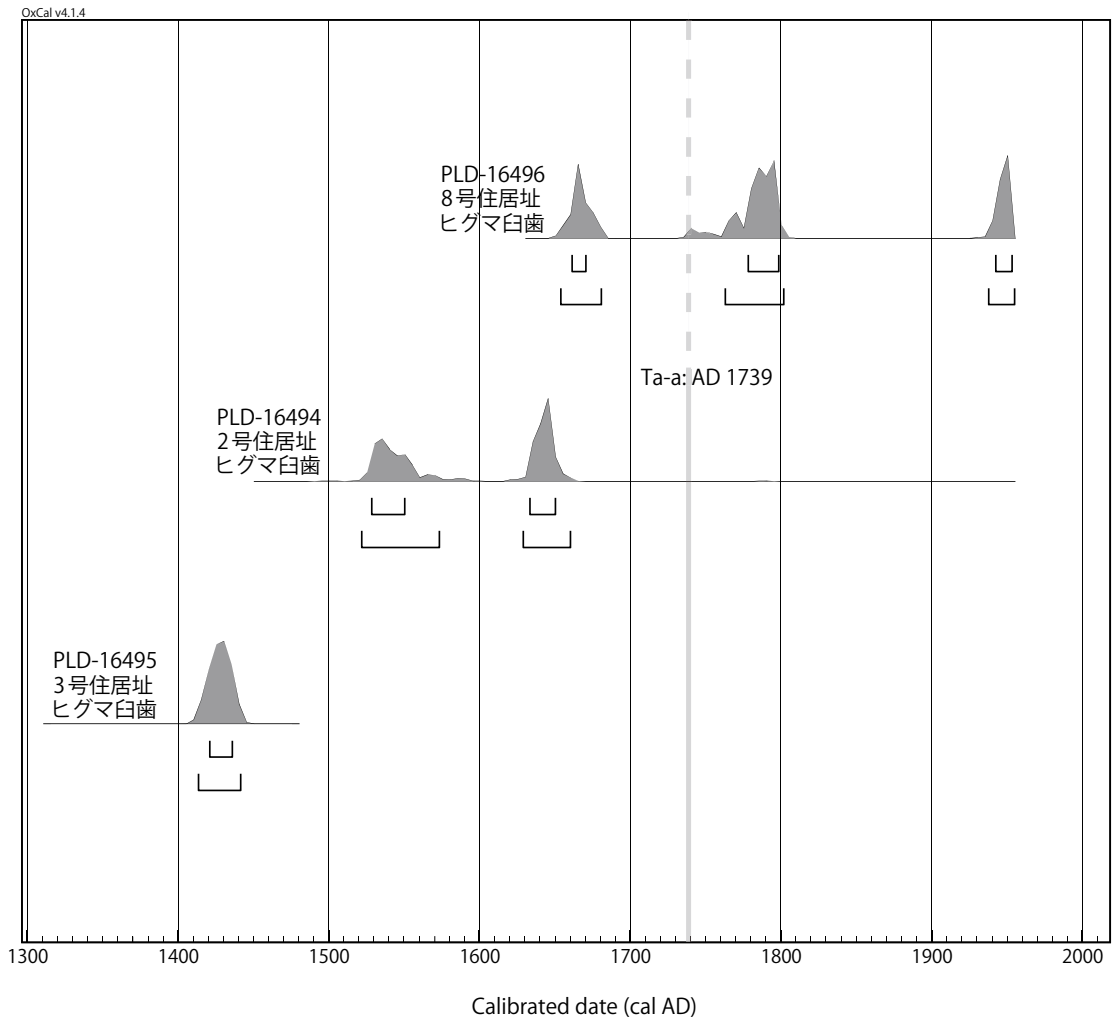


図7. 出土したヒグマ頭蓋骨の推定年代値.

## 2. 送り場遺構としての特徴

数量的に多くのヒグマ頭蓋骨が検出された一方で、具体的な送り場としての空間的状況を復元するための情報は、十分に得られていない。現在検出されているのは動物骨のみであり、送り場に相伴する物質文化資料の出土は现阶段では認められない。その理由として、調査面積が部分的であり、竪穴全域や周辺部の調査がなされていないことが挙げられる。今後調査面積を広げる必要がある。

具体的にヒグマ頭蓋骨がどのように送られていたかについての検討が必要となる。出土した位置は、竪穴の窪みの中央部というよりは縁に近いと

いう点は周辺の調査とあわせて検討する必要がある。いくつかの事例で見られたように下顎がやや離れた位置で出土したり、近接していない点を考慮すると、本来これらの頭蓋骨は竪穴内というよりは竪穴周囲にヌサが設置されていたことを示すのかも知れない。頭蓋骨の上下や方向、傾きなども考慮する必要がある。

竪穴外のある種の施設の存在の検討は、Aトレンチにおいて下顎のみが2対、シカやキツネの下顎と共に広がりもちつつ出土したことからも今後より詳細に調査検討していく必要がある。

### 3. ヒグマ頭蓋骨の年代について

今回得られた放射性炭素年代は、当初予測してきた年代を遙かに古く遡るものを含んでいた。3号竪穴覆土上層のヒグマ頭蓋骨は、この年代測定値に基づけば15世紀の遺構ということになる。また2号竪穴覆土上層出土のヒグマ臼歯も17世紀の年代を示している。このように本遺跡において竪穴覆土上層に残されたヒグマ頭蓋骨は、数世紀にわたる時間幅をもつという点は極めて重要である。竪穴覆土上層に残された熊送り遺構の時間的連続性をさらに考古学資料と組み合わせ検証できるならば、アイヌ文化期の熊送り儀礼の変遷を考察する上で興味深い資料を提供できるであろう。

また本遺跡における人間集団の遺跡空間利用の変遷、具体的には竪穴住居に見られる本遺跡の集落としての利用時期と、集落としての放棄後の儀礼空間としての利用時期という空間利用の変化を考察する上でも知る上で貴重な資料を得たとみなすことができよう。

## まとめ

2010年度の調査の概要を以下にまとめる。

### 1. 熊送り遺構について

今年度の調査によって竪穴覆土上層で確認される熊送り遺構は、竪穴I群の複数の竪穴に存在することが明らかとなった。また竪穴の窪み以外の平坦部においても何らかの送り場的な遺構が存在する可能性を指摘できる。

一方で、竪穴内から出土する「送り」行為と関係すると思われる動物骨はヒグマに限定されているが、平坦部においてヒグマ以外の動物骨も出土しており、別の遺構の存在を示唆している。

### 2. 熊送り遺構の存続期間と竪穴群との関係

昨年度までの調査によって本遺跡において確認される竪穴群は、約1,000年前に降灰したと推定される摩周b降下軽石(Ma-b5)を鍵層として新旧2つに分かれることが判明している(加藤ら2009, 2010)。

今回報告した年代測定結果にもとづけば、15世紀には竪穴の窪みを利用した熊送りが開始され、20世紀まで継続していた可能性が出てきた。2010年には7体の新たなヒグマ頭蓋骨が検出されており、これらの年代測定や死亡時期推定などの分析を進める予定である。

今後は、竪穴I群における竪穴の構築・居住の変遷、その他の竪穴群の年代の確定が必要となつてこよう。

### 3. 今後の課題

集中的な熊送りの遺構の存在が確認されたことにより、本遺跡の空間を利用した集団の推定も重要となる。遺跡内における熊送り遺構のさらなるデータの収集に加えて、周辺に確認されている遺跡との関係の探求も必要となる。事実、北側の海岸沿いにはタンネウシ貝塚が知られ、アイヌ文化期のコタンが推定されている(松田1991)。これまで集められてきた民族誌的記録や歴史文献資料も含めて調査を継続する中で本遺跡の位置づけについての検討を進めて生きたい。

## 謝辞

調査の実施にあたっては斜里町立知床博物館に、国有林内への立ち入りと作業行為の許可にあたっては北海道森林管理局網走南部森林管理署に格別の御配慮をいただいた。記して感謝申し上げます。

## 引用文献

- 荒田治・上野幸一・内山幸則・長内優之・金子秀司・佐々木敏史・沢田典孝・下井克・十田隆一・竹之下典祥・中島友文・中村誠・望月光則・守屋以智雄. 1979. 斜里平野の地形. 知床博物館研究報告1: 30-39.
- 加藤博文・松田功・木山克彦・布施和洋. 2005. 斜里町以久科北海岸遺跡測量調査第1次報告. 知床博物館研究報告26: 61-70.
- 加藤博文・布施和洋・小林彩花・山添晶久・濱野由香里・安田龍平・岩波連・内山晋吾. 2009. 斜里町以久科北海岸遺跡測量調査第2次報告. 知

- 床博物館研究報告 30: 97-107.
- 加藤博文・松田功・鈴木建治・権平拓也・岩波連・小林彩花・山添晶久, 2010. 斜里町以久科北海岸遺跡測量調査第3次報告, 知床博物館研究報告 31: 53-62.
- 佐藤孝雄, 2005. 斜里町以久科北海岸遺跡のヒグマ頭骨, 知床博物館研究報告 26: 71-76.
- 松田功, 1991. タンネウシ貝塚発掘調査報告, 知床博物館研究報告 12: 1-16.